

聖地ウルルをめぐる場所のポリティクスとアウトバックツーリズム

松井圭介*・堤 純*・吉田道代**・葉 倩瑋***・筒井由起乃****

*筑波大学生命環境系, **和歌山大学観光学部, ***茨城大学人文学部,

****追手門学院大学国際教養学部

本稿では、現代における聖地ウルルの観光動態および聖地をめぐる場所のポリティクスを、先住民文化としての聖地の管理・保全と資源化の視点から検討した。ウルルにおけるツーリズムの動態について略述したうえで、聖地をめぐる管理と観光客の動き、先住民の宗教的世界と土地所有をめぐる概念について検討し、最後に聖地をめぐる場所のポリティクスの視点から考察した。ウルルは先住民（アナン族）の人びとにとって、神話的な意味世界の中心として重要な意味を持つと同時に、観光資源としての高い価値を有している。したがってウルル登山は、聖地とツーリズムの間の緊張関係をもたらす。両者の相剋はステークホルダー（先住民、政府、観光客など）間だけでなく、内部においても多様であり、ウルル登山の制限をめぐる場所のポリティクスは、「先住民文化の真正性」と「政府の努力」と「観光客の満足感」を担保する装置として機能していることが考えられる。

キーワード：聖地、ウルル、場所のポリティクス、アウトバックツーリズム

I はじめに

オーストラリア先住民と土地に関わるテーマは文化人類学、社会学、宗教学、地理学のほか国際政治学や法学など様々な分野で研究の蓄積がなされてきた。先住民の土地利用をめぐる問題については、国立公園における管理のあり方と先住民の権利を論じた研究（鎌田, 2005a; 2005b; 金城, 1985; 2012など）や先住民政策と先住民の土地権に関わる運動を論じた研究（細川1993; モリス1995; 成田1989）などにおいて、オーストラリア先住民による土地権利回復運動とオーストラリア（国家もしくは州）政府と先住民との対話や相剋、土地管理方法などについて明らかにされてきた。先住民における土地の意味は、聖地としての彼ら自身と実存的なかわりを有していることが知られており、聖地としての土地のあり方や聖地をめぐるポリティクスに関わる研究も数多くなされている。例えば、先住民の聖地の保全をめぐるポリティクスを論じた研究（鎌田, 2002; McKercher

et al., 2008; Dudley et al., 2009) のほか、ウルルの聖地性と巡礼を論じた研究（Whittaker, 1994; Cros and Johnston, 2002; Digance, 2003）、ウルル登山の是非と登山にかかわる観光客の意思決定について論じた研究（James, 2007; Hueneke and Baker, 2009）などが代表的な研究例となる。

先住民の生活舞台の一つであるオーストラリア内陸部（アウトバック¹⁾）では、乾燥地帯の特徴的な自然環境とともに、先住民の生活・文化はツーリズムにとって重要な資源となる。ツーリズムについては、アボリジニ観光産業の実態を明らかにした青山の一連の研究（青山, 2008; 2009; 2010）のほか、エスニック・ツーリズムの形成について述べた研究（朝水, 2002）、先住民と観光客の関係を論じた研究（Ryan and Huyton, 2002）、ツーリズムが先住民に与えた影響とジレンマについて論じた研究（Dyer et al., 2003; Altman, 1989）、やオルタナティブ・ツーリズムと先住民文化とのかわりを論じた研究（窪

田, 2007; 2010; 2011) などが指摘できる。

本研究は、こうした先行研究の成果を参照しつつ、現代における聖地ウルルの観光動態および聖地をめぐる場所のポリティクスを、先住民文化としての聖地の管理・保全と資源化の視点から検討することを目的とする。まず初めに、ウルルにおけるツーリズムの動態について略述したうえで(Ⅱ章)、聖地をめぐる管理と観光客の動き(Ⅲ章)、先住民の宗教的世界と土地所有をめぐる概念について紹介し(Ⅳ章)、最後に聖地をめぐる場所のポリティクスの視点から考察する(Ⅴ章)。

研究対象地域であるウルルは、オーストラリア・ノーザンテリトリーにある Uluru-Kata Tjuta National Park (ウルルーカタ・ジュタ国立公園) 内に位置する(図1)。ウルルはアリススプリングスから約440km南西にあり、オーストラリア大陸のほぼ中心に位置している。ウルルは世界

第二の大きさをもつ一枚岩として知られ、イギリスの探検家によって命名されたエアーズロック (Ayer's Rock) の名称でも呼ばれている²⁾。比高335m、周囲9.4kmにおよぶ巨大な岩石(図2)は、この地に住まうオーストラリア先住民(アボリジニ)であるアナング族³⁾の人びとにとって、食料や水を得るための重要な生活の場であるとともに、聖地として崇拜の対象とされてきた。2015年現在、ウルルの所有権は先住民の組織が有しており、オーストラリア政府を介して国立公園として利用されており、ウルルの管理と運営は政府と先住民が共同で行っている。

ウルル・カタ・ジュタ国立公園は1987年に登録されると同時に、ユネスコの世界自然遺産にも登録がなされた。その後、ウルルにおけるアボリジニ文化の側面の評価により、世界文化遺産への追加登録がなされ(1994年)、現在では複合遺産となっている。



図1 研究対象地域のウルル

(<http://lc03.commongroundconferences.com/> をもとに作成)



図2 ウルル（エアーズロック）

II ウルルにおけるツーリズムの動態

ウルルおよびその周辺地域への観光入込客数は近年減少傾向にあり，中でも国際観光客の減少は顕著である。図3は，発地別にみたウルルへの観光客数の推移を示したものである。2005年に約40万人を数えた観光客は2013年には約25万人と大きく減少していることがわかる。

Uluru and Surrounds Overnight Visitation

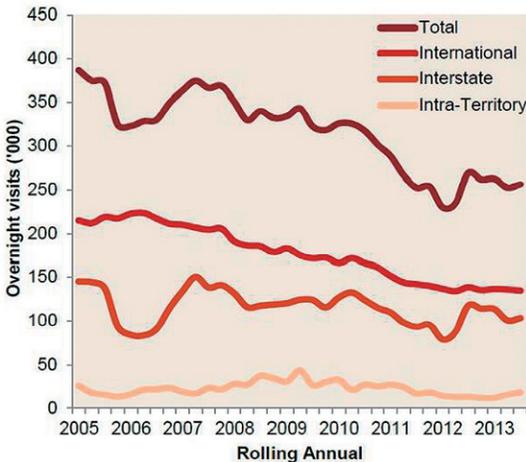


図3 発地別にみたウルル観光客数の推移 (2005-2013年)

(北部準州政府資料から抜粋)

イギリスやアメリカ合衆国からの観光客は増加しているものの，日本人観光客の減少が著しいことがその一因である。図4はウルルへの観光移動におけるオーストラリア国内発着地を示したものである。国内主要都市から遠隔に位置していることもあり，移動交通手段は航空機のみ利用が46%とほぼ過半を占め，以下バス，航空機と乗用車，乗用車のみ利用，の順であった。発着特別にみると，シドニー経由が53%と卓越し，以下メルボルン，ブリスベン，ケアンズがウルルへのゲートウェイ都市となっている。

先述したように，ウルルはオーストラリア内陸部の乾燥地帯で生活するアナンダ族の人びとにとって，生活の場として，また神話的な意味世界の中心として重要な意味を持ち続けている。オーストラリアにおける国内観光客と国際観光客の人気観光地を比較すると，オーストラリア人による観光の訪問地は，ニューサウスウェールズ州やヴィクトリア州の主要都市近郊およびハンターバレーやグレートオーシャンロードなどの主要都市に近接した観光地が志向されている。これに対し国際観光客では，主要都市のほかにウ

PORT OF ENTRY/EXIT - INTERNATIONAL VISITORS TO THE ULURU REGION

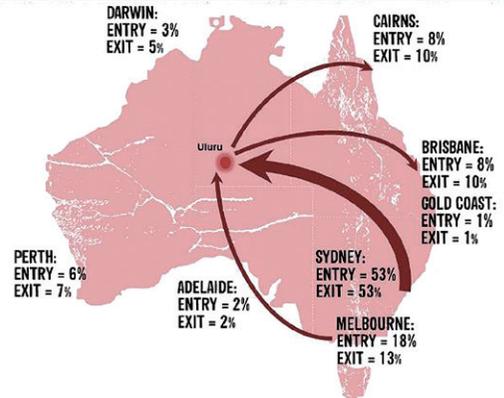


図4 ウルルへの観光移動における国内発着地 (2014年)

(北部準州政府資料資料から抜粋)

ウルルやカカドゥ、グレートバリアリーフなどの自然資源を主体とする国立公園に集中している（菊地・有馬，2010）。このことからオーストラリアに対する国際観光客のまなざしは、都市景観とともにオーストラリアの雄大な自然に向けられていることがわかる。国際観光客におけるオーストラリアの人気観光地として、ウルルは7位、アリススプリングスも10位にランクされているのに対し、オーストラリア人におけるそれでは、両地域とも上位20位にランクされていない。ウルルをはじめとするアウトバック地域は外国人観光客にとって人気の観光地であり、その要因としてアウトバック地域の自然・風土や景観が外国人にとって「オーストラリアらしさ」を表象するものとなっていることが推察される。温帯湿潤な気候帯に生活する日本人にとって、アウトバックの風土はオーストラリアの広大さと自然・歴史の魅力を感じさせる場所である。図5は、日

本を代表する旅行代理店のJ社におけるウルル観光の広告例を示したものである。そこでは写真とともに、世界最大級の一枚岩であるウルルの自然景観の特徴とアボリジニの聖地としての価値が観光地の魅力として表現されている。実際にウルルーカタ・ジュタ国立公園では、ウルルとカタ・ジュタの特異な自然景観とアボリジニの聖地としての文化的価値を目的とする観光客が多くみられる（図6）。

乾燥地域の厳しい自然条件のなか、年間20万人を超える観光客が訪れるため、水資源や自然環境、文化財を守るために観光客の入境や公園内での行動の管理が重要である。宿泊施設や商業施設は、ウルルから約20km、カタ・ジュタから約40km離れたエアーズロック（ユララ）・リゾート（1984年開設）に、まとめて立地させている（図7）。これは砂漠のなかに建設された一大リゾート施設であり、六つの宿泊施設

🌐 世界最大級の1枚岩 ウルル（エアーズロック）

エアーズロックはアボリジニの言語でウルル（Uluru）と呼ばれ、オーストラリアのほぼ中央に位置する世界最大級の一枚岩です。とてつもなく広い荒野のただ中にある、大きくて不可思議な存在から「大地のヘソ」と呼ばれることも。

ウルルを含むウルルーカタ・ジュタ国立公園の全体がアボリジニにとって大切な聖地であり、珍しい文化遺産が残る土地でもあります。

誰もが一度は訪れたいと願う、この神秘的な岩石を、さまざまな側面からご紹介します。



🌐 ウルル（エアーズロック）って何？

自然遺産と文化遺産の複合遺産！

1987年に世界遺産となった一枚の岩。自然にできた美しいカタチと、アボリジニアートなどの文化的な価値が認められ、自然遺産と文化遺産の複合遺産として登録されました。ちなみに、複合遺産になることは難しく、残念ながら日本にはひとつもありません。

大きさはどのくらい！

ウルルの周囲は9.4km。皇居1周は、およそ5km未満。ウルルの外周は、あの広い皇居の倍近くあることを思えば、その大きさを実感できるはず！

大地の鼓動！

ウルルは、浸食によって造られた岩石です。砂岩から成り、その砂岩に含まれる鉄分が酸化することで独特の赤みを帯びているので“オーストラリアの赤い心臓”とも呼ばれます。近くにいけば、大地の鼓動が聞こえるかも！

高さはなんと東京タワーより大きい！

ウルルは高さが348mもあります。何と、あの東京タワー（333m）よりも高さが高いウルル。近くに行くと、そびえ立つような大きさにびっくり！



© Tourism Australia

測り知れない深さ！

実はこの一枚岩の大部分は、地面の下にまだ隠れているそうです。一説によると、地表部に出ているのは全体のたった3分の1にしか過ぎないのだとか。全身は、いったいどんなカタチをしているのか見当もつきません！

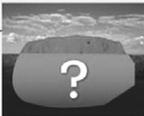


図5 ウルル観光の宣伝広告にみる表象（2015年）

（J社HPから抜粋）

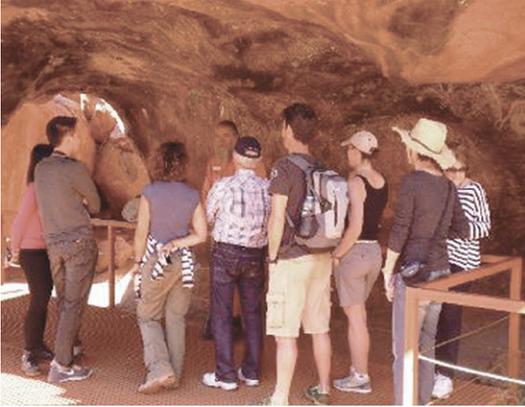


図6 先住民によるウルル観光のガイド
(2014年8月 松井撮影)



図7 エアーズロックリゾートの景観
(現地観光パンフレットから抜粋)

(ホテル)があり約5,000人が1日に滞在可能である。エアーズロックリゾートから国立公園に入城する際には、短期の場合入場料25豪ドル(2015年5月現在, 3日間有効)が必要である。国立公園内には公共交通機関は存在しないため、ツアーリストはレンタカー利用でなければ、リゾート内の旅行会社等が企画するバックツアーへの参加の形で移動・観光することが余儀なくされる。例えば、そこではサンライズ・サンセットツアー(図8)や遊歩道のウォーキング、ヘリコプターやラクダなどの乗り物を利用するツアーなど数多くのツアーが催行され、ガイドによる説明や案内(図9, 10)を受けることができる。ビジターセンター(Culture Centre)ではアボリジニにかかわる文化学習や土産物の購入が可能である。



図8 サンライズを待つツアーリスト
(2014年8月 松井撮影)



図9 ガイドによる説明を受けるツアーリスト
(2014年8月 松井撮影)



図10 乾燥地帯に生息するトカゲを手に説明するガイド
(2014年8月 松井撮影)

Ⅲ 聖地管理とツーリストの相剋

ウルルがアナング族の人びとにとって意義ある聖地であることが、ウルルの観光資源としての価値を高めていることに異論はないであろう。先住民の生活の安定とツーリズムの持続的な発展の両立はオーストラリア政府のみならず、先住民にとっても重要な課題である。そのため聖地の環境を守るために様々な管理がなされている。ウルルおよびその周辺には、儀礼の場としてカメラやビデオによる撮影を禁止する地域（図11）や立ち入りを禁止とされている聖所（図12）が数多く存在する。

聖地をめぐる管理のなかでも、ツーリストの観光体験の満足度と聖地の環境保全の調整という点で、もっとも焦点化されるのはウルル登山に関わるコンフリクトである。ウルルの地は1985年10月、アナング族に土地所有権が返還されるとともに、国立公園としての99年間の借地契約が行われた。オーストラリア政府はアナング族に対し、年間使用料として15万豪ドルおよび国立公園の入園料収入の25%を支払う契約を結んでいる。この収入の一部は、ウルルの環境整備やアナング族の人びとの生活の資として使用されるため、彼

らにとってもツーリストの来訪による入園料収入は貴重な財源である。一方で、ツーリストが聖地ウルルを「登山」することに対する忌避意識も強く、登山自粛の要請および恒久的な入山禁止がなされてきた。2009年7月にオーストラリア政府は、「訪れる人の安全、および文化的、環境的な理由」で登山禁止措置の検討を発表するも、観光業界の要望やツーリストの期待を鑑みて、2010年1月には、当面のあいだ登山を禁止しないことが発表された。一枚岩であるウルルの登山路は滑りやすいうえ、風の影響も受けやすく、これまでに滑落事故などによりこれまでに通算で36名もの死者を出しており、安全面での配慮から登山の可否判断となる気象事件の厳格化がなされている⁴⁾。入山禁止は夜間時間帯（日没後30分～日の出前30分）のほか、次の六つの条件のうち一つでも当てはまる場合に禁止とされる。①3時間以内に雨、または嵐が予想される時。②標高2500フィートでの最高風速が25ノットある時。③雲が頂上より下に下りて来ている時。④救助作業が行われている時。⑤天気予報で気温が36度以上の時。⑥伝統的所有者から文化的な理由による要請があった時。

ウルル登山についての注意書きは、1カ所設け



図11 「儀礼の場」における映像撮影の禁止の看板
(2014年8月 松井撮影)



図12 「聖域」における立ち入りの禁止の看板
(2014年8月 松井撮影)

られた登山口に大きな看板とともに掲示されている(図13, 14, 15)。そこには英語のほか、フランス語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語、中国語、日本語の7カ国語で登山条件が説明されている。さらにはアナング族からの願いとして、登山自粛の要請に関する案内板も設置されている(図16)。ここでは次のような文言がアナング族からのメッセージとして、記されている。

「皆さんが登山しているのはアナング族にとってとても重要なものです。登るべきではありません。登山することは全く意味がありません。重要な事は周りの全てに耳を傾ける事です。私たちは

ジュクルパ(伝統的な法則)に基づき人々に正しい行いをしてもらうように伝える義務があります」

ここでは、ウルルに登らないことが「正しい行為」として奨励されている。こうした要請は、オーストラリア政府の態度からも看取される。図17は環境省のホームページであるが、ここでも「We do not climb」と明記されている。これはウルルの伝統的所有者である先住民の権利こそ尊重



図13 ウルル登山についての注意書き
(2014年8月 松井撮影)



図15 登山禁止および理由に関する告知
(2014年8月 松井撮影)



図14 登山口にて掲示板をみる観光客
(2014年8月 松井撮影)

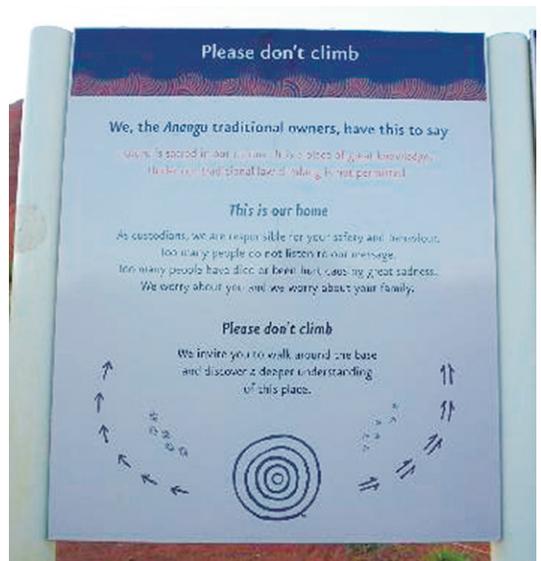


図16 Please don't climbの案内看板
(2014年8月 松井撮影)

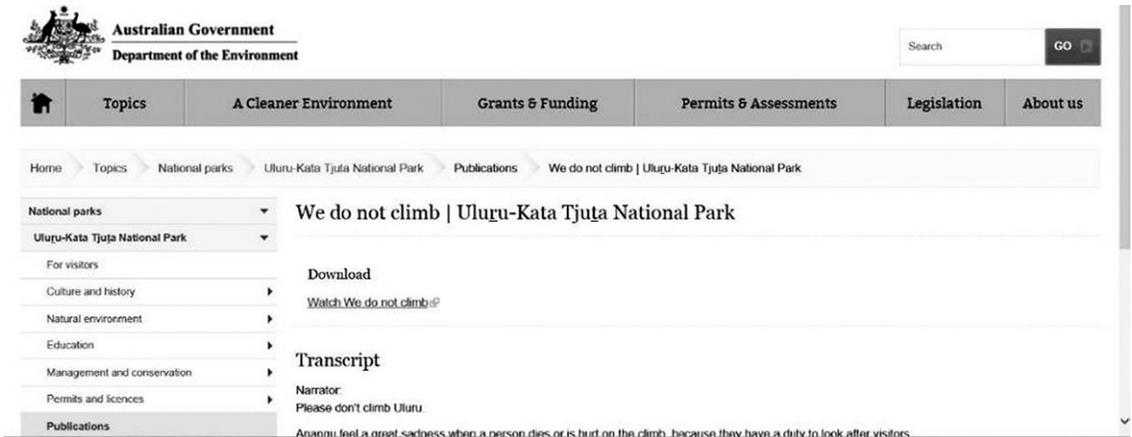


図17 オーストラリア政府環境省におけるHPの広報

されるべきだとする考え方に基づくものである。

それではウルルを訪問する観光客が実際にウルル登山に対してどのような行動を示したのだろうか。表1はHueeneke and Baker (2009) による国籍別にみた観光客によるウルル登山者割合(2006年)を示したものである。観光客の国籍はオーストラリアが最多(1455人)で、アメリカ合衆国(150人)、ドイツ(78人)、イギリス(74人)、日本(71人)の順であり、このうち登山者は全体の38%にあたる835人であった。

表1 ウルルにおける訪問者と登山者の国籍別割合(2006)

	訪問者		登山者	
	人数 (人)	割合 (%)	人数 (人)	割合 (%)
オーストラリア	1,455	66.9	574	68.7
アメリカ合衆国	150	6.9	34	4.1
ドイツ	78	3.6	16	1.9
イギリス	74	3.4	31	3.7
日本	71	3.3	59	7.1
その他	347	15.6	121	14.5
合計	2,175	-	835	-

2006年6月～7月に540件(2,175人)に対する調査の結果である。

(Hueeneke and Baker (2009) により作成)

この上位5か国について登山者の割合をみると日本人が最多で83% (59人)であり、以下、イギリス人42% (31人)、オーストラリア人39% (574人)、アメリカ人23% (34人)、ドイツ人21% (16人)であった。欧米諸国と比較して日本人の登山割合が突出して高いことがうかがえる。Bakerの調査によると、観光客の大多数は「登らないことの意義」を理解しているという。一方で登らなかった人にその理由を尋ねると、必ずしも登らないことの意義に共感したからではなく、ウルル滞在期間の短さや気象条件による登山禁止によってやむなく断念した人が多い。「アナング族の人びとの要請への共感」と「かけがえのない観光体験への期待」の間で気持ちが揺れ動いていた様子がうかがえる。国立公園スタッフとの事前の交流により、登山を思いとどまった観光客もみられた。各種ツアーの拠点となるビジターセンターは、ウルルおよび周辺地域における先住民と国家との間の土地所有や利用をめぐる歴史や先住民におけるウルルの文化的価値に関わる知識を修得することが可能であり、ツアーガイドからも同様の語りを聞くことができる。こうしたスタッフとの交流や知識の確認行為が登山の抑制要素として働

いていることが推察される。

一方で、先述したようにウルル登山は2015年5月現在においても禁止はされていない。このことから、観光客の減少が国家や州政府のみならず、アナン族の人びとにとっても経済的な損失であり、聖地の保全・管理とツーリズムの利益が相剋していることがうかがえる。ウルルカタ・ジュタ国立公園は、政府・環境省のセクターである Park Australia とアナン族との共同管理により運営されており、その理念は「地域における自然環境と文化環境を守ること」である。このことは「伝統的所有者であるアナン族の権利・利益・技能・知識を尊重する」ことを意味しており、“Keep Tjukurpa strong (Anangu traditional law and way of life)” という表現で示されている。この「ジュクルパを力強く守ること」とは何かの検討を通して、次章で聖地ウルルの開発と保全の原理を考察する。

IV 場所と人間とのかかわり：先住民の宗教的世界

ジュクルパ (Tjukurpa または Jukurupa) については、オーストラリア先住民の社会・生活・文化を研究するうえで極めて重要な概念として、主として人類学者や社会学者によって研究が蓄積されてきた (木村, 2001; 奥山, 1995 など)。英語では “dreaming” と翻訳され、先住民における「天地創造神話」として理解されている。ここで重要な点は、ジュクルパが「生きている神話、社会的・歴史的事柄を含んだ、全ての時に当てはまる不変の聖なる物語」であり、「永遠なる祖先・英雄によって世界全体が基礎づけられ、形づけられたことを神話的に説明したもの」としての、時空を超えた世界の説明原理になっていることである (木村, 2001)。ジュクルパは絵画や彫刻といった形式で象徴的に表現されるほか (図18)、ウルルを周回する歩行路にも案内板による説明がなさ

れており (図19)、ウルル観光をする観光客にとっても先住民にかかわる知識として容易に獲得されるものとなっている。

ジュクルパの内容として、木村 (2001) は以下の4点を挙げている。①ジュクルパは永遠なる祖先英雄によって、世界全体が基礎づけられ形づけられたことを神話的に説明したものであること。②大地における祖先の霊的力の具体化による力、ある地点やある種の植物界・動物界における祖先の力を、現在の人間がどのように地用できるかについて説明したものであり、大地はジュクルパの力を顕しているだけではなく、その力を人間に移譲するため大地は象徴ともなること。③ジュクル



図18 ジュクルパの表象
(2014年8月 松井撮影)



図19 ジュクルパの説明案内版
(2014年8月 松井撮影)

パは神話的基礎に基づいた道徳的、社会的、儀礼的行為に関わる一般的な生き方であること。④アボリジニの個々人がこの世への出現の場所との間に持つ特別な関係、あるいは氏族の一員であることによって身につけるある場所との特殊な関係を指すこと、である。いずれも人間と世界、大地とのかかわりを基礎づけるものであるが、特定の場所とのかかわりという点でいえば、アボリジニ個人にとって、自分の母親が自分を身ごもっているとして初めて感じた場所は、霊が母親の体内に入った場所であり、その場所と自分とは特別に密接な関係を終生持つとされる。その場所は人間としての自分のアイデンティティの場所であり、場所と人間との関係は、「その人はその場所を大切にし、守る」という言い方で表現される

ここで重要な点は、ジュクルパとは天地創造にかかわる単に過去の出来事の叙述ではないことである。世界において創造的な力はジュクルパの力であり、人間はそれに従うものである。アナング族の人びとにとって、この世の大地や景観はジュクルパの顕現として理解されるものであり、「神話の出来事を深く知り、儀礼の行為、行為の規範、多様な生き物の習性などからジュクルパの力を読む」ことが必要とされる。したがってアナング族にとって土地所有、すなわち土地の権利と責任を相続することは、それらの土地にまつわるジュクルパを教わり、その土地で行う儀礼の知識を獲得することを意味しており、特定の土地を所有することとは、法律や契約により所有を認められるものではなく、その土地の特殊な形状や特徴にまつわるジュクルパを知り、それらの場所に現存する祖先との儀礼的交流を絶え間なく行うことである。このように先住民・アナング族における自然環境の認識は、何世代もかけて蓄積され、絶えず更新される知識資源の持続的利用が前提とされているのである（木村、2001）。

このようにアナング族における場所と人間との関わりは、いわゆる西洋的な価値観に基づく土地所有概念とは対極のあり方を示している。土地は投機や取引の対象ではなく、人間と実存的な関係が結ばれる存在である。アナング族における天地創造神話（ジュクルパ）とは、永遠に生きられる神話である。祖先英雄によって世界は基礎づけられ、世界を動かしていく力の淵源はジュクルパにあり、大地の景観もまたジュクルパの顕現として理解される。この土地にまつわるジュクルパの物語を理解し、儀礼の斎行者が土地の「所有者」として意味をもつことになる。したがって政府との契約によるウルル地域の土地貸与というシステムは本来、アナング族にとって極めて便宜的、妥協的の産物であり、ステークホルダー間（例えばアナング族の人びと、行政、ツーリスト…）のコンフリクトとたえざる調整が必要とされる。

V おわりに：聖地における管理と資源化の問題

以上本稿では、現代における聖地ウルルの観光動態および聖地をめぐる場所のポリティクスを、先住民文化としての聖地の管理・保全と資源化の視点から検討してきた。そこには、ツーリズムによる聖地の利用と保全が相克している状況が再確認された。しかも聖地の利用と保全の対立図式は、(先進国の) ツーリストと先住民、オーストラリア政府と先住民といった単純な図式ではない。ツーリストにおける観光体験の質的保証およびツーリストの量的確保と聖地の保全は、観光入込客の増減による観光収入の変化という意味で先住民にとってもジレンマを抱えている。また土地所有にかかわるステークホルダー間の関係も、いわゆる西洋的な契約で一義的に解決される問題ではない。オーストラリア政府は1987年、アナング族に土地所有にかかわる権利を返還し、同時に国立公園として99年間借り上げる契約を結んだ

が、西洋社会の契約概念とアナング族における土地所有の概念は大きく異なる。彼らによる土地所有の意味はジュクルパを理解し、場所にまつわる祖先との儀礼的交流を絶えず行うことであり、土地所有の前提としてウルルをめぐる神話的世界が生きていることが前提となる。したがってアナング族はウルルにおける儀礼空間の維持と聖域である山体そのものへの登山の禁止を求めるのは当然のことであり、オーストラリア政府も先住民の権利としてこうした動きを尊重している。その一方で双方とも完全に登山禁止としないのは、単に観光業界からの要望ではなく、そこにはステークホルダー間のさまざまな思惑の交差が読める。すなわちウルル登山の制限をめぐる場所のポリティクスは、「先住民文化の真正性」と「政府の努力」と「ツアーリストの満足感」を担保する装置として機能しているのではないかと考えられる。

赤茶けた大地に忽然と威容をなすウルルの景観はアウトバックツーリズムの醍醐味である。国内外からのツアーリストにとってウルルに登ることへの期待があることは十分にわかる。一方でウルルに滞在する際には、多くのツアーリストはエアーズロックリゾートを利用する。砂漠地帯のなかで快適にコントロールされた自然を満喫する。リゾートホテル内には、シャワーはもちろんプールもあり、レストランでディナーを楽しむこともアウトバックツーリズムの魅力の一つである。このような擬似的な自然体験を経験するツアーリストにとって、エスニック・ツーリズムとして真正性を担保するのが「ウルルに登らないという態度」であると考えられる。ツアーリストにとって、ウルルを訪問してガイドやビジターセンター等の説明により、「登山しないことが正しい文化的態度」であることを確認する。登山は禁止されているわけではないものの、否、むしろ禁止されていないがゆえに、登らないという行為が意義づけられるので

ある。政府もアナング族も「登らないことが正しい態度であり、登らないように要請」している。この登山禁止はしないが理解の要請をすることは、政府にとってもアナング族の人びとにとっても「免罪符」となる。またツアーリストにとっても、「登ることに達成感」を提供し、「登らないことに満足感（価値観）」をもたらす巧みな文化的装置として機能しているものと解釈される。ここにはアナング族に寄り添い、先住民文化に理解ある政府という演出とアナングの人びとのしたたかな観光戦略という側面も看取されよう。こうした問いは、オーストラリアの文脈でいえば、カカドウ国立公園におけるウラン鉱山開発の問題とも関わってくるし（鎌田，2002）、他方、（主として文化人類）学者によって構築される「先住民文化」と「資源化」の相剋をもはらんでいるといえよう。こうした解釈については、さらに実証的な調査を通じて論証をしていくことが必要である。もって今後の課題としたい。

【付記】

本稿は2012-2015年度科学研究費補助金「ネオ・リベラリズムの進展とアジア化するオーストラリア社会に関する人文地理学的研究」、基盤研究（B）（海外学術）研究代表者 堤 純（課題番号24401036）による成果の一部であり、本稿の骨子は、日本地理学会2015年春季学術大会（2015年3月28日：日本大学）において発表した。

注

- 1) アウトバック（outback）については正式な定義は存在しない。しかし、オーストラリア国民一般の間には、アウトバックとは「内陸部の荒涼たる砂漠地帯である」という共通認識のようなものが存在する。プリズベンとアデレードを直線で結んだ線を境にして、その線の南東部の比較的湿潤な地域と比較して、その線の西側一帯の乾燥した地域がアウトバックと呼ばれている。
- 2) 西洋社会に対しては、イギリスの探検家・ウィリアム・ゴスによる探検により発見（1873年）され、

当時のサウス・オーストラリア植民地総督であったヘンリー・エアーズに因んで命名された。

- 3) アナング族とは、ウルル周辺に居住するオーストラリア先住民（アボリジニ）の1部族である。
- 4) オーストラリア放送大手ABCのサイトによる。

<http://www.abc.net.au/news/2013-06-03/maher-please-don27t-climb-uluru/4728726> (2015年5月31日閲覧)

文 献

- 青山晴美 (2008) : オーストラリアにおけるアボリジニ観光産業の実態 マーケット調査とケーススタディ No.1. 愛知学泉大学・短期大学紀要, **43**, 63-72.
- 青山晴美 (2009) : オーストラリアにおけるアボリジニ観光産業 no.2 アボリジニ文化の表象について : ケーススタディ no.2. 愛知学泉大学・短期大学紀要, **44**, 81-90.
- 青山晴美 (2010) : オーストラリアの観光産業 no.3 エコツーリズムの現状と可能性について : ケーススタディ no.3. 愛知学泉大学・短期大学紀要, **45**, 87-96.
- 朝水宗彦 (2002) : オーストラリアにおけるエスニック・ツーリズムの形成. オーストラリア研究, **14**, 22-36.
- 奥山倫明 (1995) : 歴史的限定と宗教的創造性 : エリアード宗教史におけるオーストラリア宗教論. 東京大学宗教学年報, **Ⅻ**, 21-32.
- 金城秀樹 (1985) : オーストラリア原住民の土地権 - Aboriginal Land Rights (Northern Territory) Act, 1976 を素材として -. 法社会学, **37**, 151-156.
- 金城秀樹 (2012) : オーストラリア先住民の土地所有 - 共同体と共同体的土地所有 -. 札幌大学総合論叢, **33**, 49-65.
- 鎌田 真弓 (2002) : 「聖地の保全」をめぐる政治的対話 - オーストラリア・アボリジニの鉱山開発反対運動を事例として -. 季刊国際政治, **129**, 124-140.
- 鎌田 真弓 (2005a) : 土地資源管理と先住民族 : カカドゥ国立公園を事例として. IPSHU 研究報告シリーズ, **35**, 107-129.
- 鎌田真弓 (2005b) : オーストラリア先住民族によるランド・マネジメント - アーネムランド、カカドゥ国立公園、ニトゥミラック国立公園 -. NUCB journal of economics and information science, **49**(2), 119-135.
- 菊地俊夫, 有馬貴之 (2010) : オーストラリアの国立公園における環境資源の保全と利用の地域的性格. 観光科学研究, **3**, 41-55.
- 木村 武史 (2001) : オーストラリア・アボリジニの宗教的エコロジーの研究. 地球環境研究, **50**, 25-41.
- 窪田幸子 (2007) : アボリジニ美術の変貌 文化資源をめぐる相互構築. 資源化する文化 : 資源人類学, **2**, 181-208.
- 窪田 幸子 (2010) : アボリジニのオルタナティブ観光とその意味 - アーネムランドでの試みから. 北方民族文化シンポジウム報告書, **24**, 43-48.
- 窪田幸子 (2011) : オーストラリア、都市アボリジニのアート・アイデンティティの闘争と抵抗、そして交渉 -. 北方民族文化シンポジウム報告書 **25**, 37-42.
- 細川弘明 (1993) : オーストラリアの先住民族政策とアボリジニー土地権運動. 公明, **9**月号, 137-145.
- 成田弘成 (1989) : オーストラリアエスニック政策の試練 : 転換期を迎えるアボリジニー行政とその展望. 族, **11**, 1-19.
- モリス, J. F. (1995) : 善意の破綻 - 十九世紀前半オーストラリアにおけるアボリジニ政策 -. キリスト教文化研究所研究年報 / 宮城学院女子大学キリスト教文化研究所 [編], **29**, 135-173.
- Altman, J. (1989) : Tourism dilemmas for aboriginal Australians. *Annals of Tourism Research*, **16**(4), 456-476.
- Cros, H. D. and Johnston, C. (2002) : Tourism tracks and sacred places: Pashupationath and Uluru. Case studies from Nepal and Australia. *Historic Environment*, **16**(2), 38-42.
- Digance, J. (2003) : Pilgrimage at contested sites. *Annals of Tourism Research*. **30**(1), 143-159.
- Dudley, N., Higgins-Zogib, L. and Mansourian, S. (2009) : The links between protected areas, faiths, and sacred natural sites. *Conservation Biology*, **23**(3), 568-577.
- Dyer, P., Aberdeen, L. and Schuler, S. (2003) : Tourism impacts on an Australian indigenous community: a Djabugay case study. *Tourism Management*, **24**(1), 83-95.
- Hueneke, H. and Baker, R. (2009) : Tourist behaviour, local values, and interpretation at Uluru: 'The sacred deed at Australia's mighty heart'. *Geo Journal*, **74**, 477-490.
- McKercher, B., Weber, K. and Cros, H. D. (2008) : Rationalising Inappropriate Behaviour at Contested Sites. *Journal of Sustainable Tourism*. **16**(4), 369-385.
- Ryan, C. and Huyton, J. (2002) : Tourists and Aboriginal people. *Annals of Tourism Research*, **29**(3), 631-647.
- James, S. (2007) : Constructing the Climb: Visitor Decision-Making at Uluru. *Geographical Research*, **45**(4), 398-407.
- Whittaker, E. (1994) : Public discourse on sacredness: the transfer of Ayers Rock to Aboriginal ownership. *American Ethnologist*, **21**(2), 310-334.